

1、はじめに

中国農村経済発展のパターの中で、温州モデルは浙江省の典型として挙げられる。公有制を主体とする中国経済において、その対立とも言える民間の商人や企業家を主役的存在としての「温州経済モデル」はきわめて無視できない。嚴善平によれば、温州は沿海部の発展した大都市からは距離があり、社隊工業も少なかった。そのため他出せざるをえない農民が多数に上っていたが、改革開放後は他出経験を持つ人々の体験をともに起こした家内工業の製品の販売網を、温州独特の慣行を基盤に、拡大していくことにより経済発展が進んだものである。

温州人は明、清の時代から外へ出て仕事をしており、解放後は他地域へ出ることが制限されたため、彼らはこの地で農外の就業機会を探せざるを得なくなり、服、靴、めがね等の小商品の生産を開始した。彼らの「小商品大市場」の方式はますます多くの投資主体を吸収していった。温州経済はかつて「資本主義か社会主義か」の論争で、批判されたこともあり、温州人はこれに対し、事実によって批判者に説得した。改革開放後、市場経済が導入され、市場重視の方向が実現し、呪縛を解かれた温州人は家族経営の個人経済が大発展し、その結果、中小企業の大軍団が形成された。

温州経済は民間経済であり、民間人が自立更正によって生存や発展を求める経済である。温州人は他所へ進出していくことに抵抗がかく、金儲けのために、海外へもかなり行かれる。さらにその地で、温州村を形成するまでネットワーク感が強い。日本にも温州人のみの組織が作られている。周知のように、不動産投資ブームから石炭投資ブームなど、温州マネーも次から次へと中国経済にきわめて影響力を与えている。

本研究は温州商人のビジネス展開プロセスかを考察することによって、温州商人と市場の関係を明らかにしたい。最初に温州経済発展の背景として、温州の社会歴史面を遡る。次に温州商人の形成過程として家族の変容やその特徴と意識、特に温州商人のネットワークについて、主に現地調査や文献資料を利用して分析を行いたい。農民から商人への変身、そして企業家の形成の事例も二つか取り上げたい。第三に、在日温州人の事業展開も本研究の重点として置きたいと思う。最後に温州は個人経済からスタートし、家族経営の方式と主としているが、長所があるが、弱点もある。本研究は温州商人を新たな段階へ向かうためにその問題点を提起し、解決法を試みる。

2、温州の概況

温州は浙江省東南沿海の山間部に位置し、典型的な「人多地少¹」の地域である。市は3区8県から構成され、域内面積は11,784 m²、その中で山地78%、平原17.5%、川や島が4.4%を占めている。西側を山に、東側を海に囲まれ狭隘で豊かな土壌に乏しい地理条件がある一方、人口は浙江省内の市で最大の771.99万人に及んでいる。人口密度は655/km²、一人当たり平均耕地面積は0.32畝²であり、土地不足が極めて深刻であることを理解できる。

農業だけで生活できないため、農民は必ず農業以外の生き道を求めなければならない。

¹ 「人多地少」というのは人口が多く、耕地が少ないことを指している。

² 1畝は666.667k m²に等しい

温州では歴史的に手工業が発達し、海に面しているというメリットがあり、宋の時代に温州は通商港となった。明清時代は温州府を設置され、海上貿易が繁栄し、陶器、紡織品、漆器、皮革などが海外に輸出している。しかし、民国時代に至って、戦乱が頻発し、経済は段々後退した。当時温州人は外国に渡り、生計を立てる人が日増しに多くなった。解放初期、経済がある程度回復すると、1953年からは社会的改造が発動された。しかし、温州は従来より台湾に近い地理条件から中央政府が戦争に備えたため、生活や生産に必要なインフラ整備は十分に行わなかった。計画経済のしたに、生産隊が経営する「社隊工業」もすくない、さらに、個別の手工業などが「資本主義の尻尾」は休業となり、住民の農外収入が減少した。わずかな土地で縛られた農民は、結局貧困状態に陥ることになった。

「人多地少」かつ弱い経済基盤だが、温州経済は改革の時代になるとなんと急ピッチで成長し、発展が最も速く、貧困問題の解決にも大きな成功を収めた。統計によると、1978年から2000年まで、温州市の国内総生産を13億元から830億元となった。1978年に比べると約65倍である。温州市の経済成長に伴い、インフラも次第に整いつつある。既存の市を南北に縦断する国道104号線、東西を横断する330号線以外に、1990年には市独自財政により温州国際空港が開通された。さらに1996年に外資との合弁で金華からの鉄道も運行し始めた。

温州経済開発モデルも「温州モデル」として全国から脚光を浴びた。当然、イデオロギーのしたで、温州民間経済発展は順風に帆を揚げたように行くことはできなかった。市場経済化の初期、民間企業に対する制限が厳しかった。しかし、温州は全国の先駆として株式組合制企業³がスタートした。1980年代、温州モデルは何度も批判されたことを契機に社会的関心を集めた。中央政府高官も次々と温州を訪れた。そして、研究者や学者も様々な調査を行い、改革の方策についての論争が繰り広げられていた。菊池は論文で温州民間企業の発展における企業と政府の関係を詳しく論述した。その中で、温州市当局は地元の企業を発展させるため、現行の政策と関連法規を改革しながら、中央政府の政策の歩調とも合わせ、温州経済の成功に大きな役割を果たしたことが窺える。市政府は私営企業を合法的な企業組織として様々な政策を打ち出し、この企業組織を擁護する姿勢を明確にした。そうして中央の党、政府は結局、温州での株式組合制度の発展を肯定的に評価し、全国的な規模で合法的な集団制企業として承認し、企業の成長を奨励することになった⁴。

参考文献：

温州統計局 2000年-2008年『温州統計年鑑』中国統計出版社

厳善平 1997年 『中国農村・農業経済の転換』勁草書房

菊池道樹 2002年12月 「民間企業の発展と地方政府の役割—移行期における中国温州の事例2」『経済志林』法政大学経済学会

杜潤生 2002年 『中国農村改革論集』農山漁村文化協会

http://www.wccj.net/utf/wccj/wzgy_jp.php 日本温州総商会ホームページ

<http://www.wenzhou.gov.cn/index.html> 温州市政府ホームページ

³ 温州地域における株式組合制企業について資本、労働など異なる所有者に属する生産要素を集中して統一使用し、利益を均等化し、自己集資、自己経営、リスク分担を経営上の特質とみなす。

⁴ 菊池道樹 2002年12月 「民間企業の発展と地方政府の役割—移行期における中国温州の事例2」『経済志林』法政大学経済学会 287ページ